■ フォト・エッセイ ■

チベットの聖山カン・リンポチェへの遥かな道

写真・文
船尾　修
Osamu Funao

圧倒的な存在感で迫ってくるカン・リンポチェの北面。この姿を拝むためには、標高5000メートルという薄い空気のなかを歩いてこなくてはならない

チベット人は祈り好きである。いや、「好き」という表現は適当ではないかもしれない。わたしはかれらを見ていると、「祈る」行為が人生そのもの、と思えることがある。食堂でチベット人が常食にしているトゥクパと呼ばれるうどんをたのむと、テーブルにもってきてくれた女性はその後、椅子に腰掛けてぼんやりテレビを見ながら真言を唱えている。バスの車中では、粋なハットをかぶった紳士が目をつぶりながら数珠をひと玉ずつ繰り出している。宿の従業員は朝、客室にお湯を配りながらやはりぶつぶつと真言を唱えつづけている。

かれらは旅行好きでもある。わたしが各地を旅していることを話すと、自分も行ったことがある、あるいは行ってみたいと答える人が多い。しかしその目的はわれわれとは少しちがうようだ。温泉に入りたいとか、おいしいものを食べたいというものではなく、まだ見ぬ土地の僧院や古寺を巡りたい、参拝したいというものである。昔は日本人にとっても、旅行というのはそういうものだった。お伊勢参りなどは、日本人なら一度は参ってみたい旅行先だった。

チベットにはたくさんの聖地がある。中央の都ラサにも、ジョカン寺やデプン寺といった名の知れた僧院がたくさんある他、亡命したダライ・ラマ一四世が住んでいたポタラ宮なども、信仰の対象となっている。毎日、朝からたくさんのチベット人参拝者が、数珠やマニ車、カタと呼ばれる白い布、

カン・リンポチェを巡礼中のチベット人グループ。かれらの多くはまだ暗いうちに宿を出て、1日で52キロの道のりを歩きとおす

遊牧民の娘たち。チベットのほとんどの地は標高の高い高原。ラサなどの都市以外で暮らす人の多くはヤクや羊を飼う遊牧民である

ラサの中心にあるジョカン寺には地方からもたくさんの巡礼者が訪れ、かれらの祈る姿にそこかしこで出会える

タルチョーという五色の旗などを手に、僧院の周囲をまわったり、伽藍を拝観してまわる姿に出会う。僧院の入り口では、灯明として使う溶けたバターをポットに入れて売る人や、土産物を商う人たちが威勢のよい声を掛けている。伽藍の中では、全身を投げ出す五体投地で仏様に祈る。宝石が散りばめられた仏舎利塔をご利益があるようにと願いながら撫でていく。

そんなかれらにとって、巡礼先としては最も訪れるのが困難であり、かつ一生に一度は参拝してみたいものだと夢見るのが、聖山カン・リンポチェかもしれない。日本ではサンスクリット語の「カイラーシュ」という呼び名のほうが知られているが、チベット人は皆カン・リンポチェと呼んでいる。ラサから西へ千数百キロ。一〇年ほど前に訪れたときは四駆の車で一週間かかったが、二〇〇七年春に再訪したときには四日で麓の村タルチェンへ到着した。新疆ウイグル自治区へ抜ける新蔵公路が急ピッチで造成中なためである。しかしチベット人の中には東部から徒歩で四カ月かけて巡礼にやってくる人もいるというからすごい。

カン・リンポチェを一周するのに、われわれフツーの人は三日かかる。が、チベット人の多くは五二キロの行程を一日でまわる。わたしは撮影機材もあるので、ポーターをひとり雇った。彼女は四川省に近い村に住む尼僧で、巡礼と小遣い稼ぎを兼ねて麓に数カ月滞在していた。すでに三〇回以上

カン・リンポチェの巡礼路の途中には、岩と合体したような僧院がいくつかあり、僧侶が祈りを捧げている

僧院の伽藍の中はいつも灯明であるバターの匂いが充満し、参拝者によるお供えの麦粒や賽銭がおかれている

カン・リンポチェの巡礼路の途上、聖山がのぞめる場所には巡礼者たちが積んでいった石の塚がある

まわったという。巡礼路からは、カン・リンポチェが岩の間から見え隠れする。よく見えるポイントには、巡礼者によって小石が背丈以上に積まれたり、マニ（真言）が石に刻まれていたりする。

歩き始めてすぐ、鳥葬の現場にぶつかった。そこは巡礼路から外れて少し小高い丘を登ったところにあり、ふだん外国人が行けるところではないのだが、尼僧のジミユピが写真を撮らないことを条件に連れて行ってくれたのだ。初老の男の遺体が、僧によって解体されている最中だった。遺族らしき人がふたりだけ見守っていた。そこには遺体を食べるはずのハゲワシはなぜかいなかった。後から聞いた話では、ハゲワシは飛んでこないときもあり、代わりに犬が食べるということである。鳥や犬に食べさせるというチベット人の死生観は、われわれの価値観からすると受け入れがたいものを感じるが、火葬や土葬には不向きな標高五〇〇〇メートルという空気の薄いこの地に立っていると、魂の抜けた肉体は単なる物質に見え、かれらの葬送の仕方がしごく当たり前に思えてくるから不思議である。

カン・リンポチェが最も荘厳な姿を見せる北面の僧院に宿泊を請うた。若い僧侶が何人か、修行を積んでいた。信じるものをきちんともっている者は自信に満ち溢れている。勤行を唱え、きびきびと動きまわるかれらを見ていると、今の日本人はなんと自信を喪失してしまったことかと思わずに

マパム・ユムツォ（マナサロワール湖）湖畔に立つチョルテン（仏塔）からは、はるか遠くにカン・リンポチェの神々しい姿がのぞめた

雪の中を五体投地で巡礼する人。約１カ月かけてカン・リンポチェをまわるという

チベット人の食堂では、トゥクパ（羊肉入りうどん）やツアンパ（麦焦がし）、バター茶などが食べられる

本エッセイ執筆後の三月一四日、チベット・ラサで騒乱発生との報に接した。本エッセイで紹介されている写真は、主に二〇〇七年五月に撮影されたものである。この場をお借りして、旅の中で出会った人々の無事と亡くなられた方々のご冥福をお祈りしたい。

はいられない。信じるものをもたない者の悲劇を遠くチベットの果てで想った。

ここからドルマ峠までが難関だ。春の時期、登路は雪に覆われている。空気が薄く、呼吸が思うようにはできない。からだは鉛のように重い。チベット人は巡礼を一三周するのがふつうである。一三周すると、カン・リンポチェの内院へ参ることが許される。そこまで信仰心のない日本人にとっては、一三周というのは果てしない難行苦行に思える。チベット人の中には信じられないことに、五体投地で巡礼する人も少なくない。一周するのに一カ月かかるという。日本人の時間感覚では、何がそこまでかれらを駆り立てるのか、理解できないだろう。

タルチョーがはためくドルマ峠に到着し、凍える手をそっと合わせる。何も考えない。悟りの境地とまではいかないが、祈りというものの意味がほんの少しだけわかった気がした。下りにさしかかると、からだは急に軽くなっていく。草地ではヤクがのんびりと草を食み、清らかな小川が流れていた。ようやく人間や生き物が住む世界へ戻ってきたのだ。そのとき、はっと気づいた。カン・リンポチェの巡礼は、人間の苦しみの元である輪廻を追体験することだったのだ。生から死へ、そして再び生を受けるという。チベットの人は「生きる」という苦しみから解放されるために、毎日を祈りながら生きているのである。

（ふなお　おさむ／写真家）